

最近のESRI研究成果より

「人生自己決定意識の
規定要因」について

経済社会総合研究所政策調査員

河野 志穂

1. はじめに

社会指標とは、国民の生活の諸側面を包括的かつ体系的に測定する非貨幣的統計を中心とする統計指標¹を指す。その発端は1960年代にアメリカで起こった社会指標運動である。当時、アメリカでは、経済成長に伴う都市化の問題に対処する必要があったが、問題状況を把握する統計が未整備であった。そこで社会の状態を把握するとともに、目指す社会の在り方を示すものとして社会指標に期待が寄せられた。このように、社会指標は、当初から公共の福祉に資することを目的としており、エビデンスベースの政策形成を志向するものである。

社会指標には、客観指標（貨幣価値など絶対的な基準に基づくもの）と主観指標（幸福感など回答者の主観にもとづくもの）がある。2008年にフランスのサルコジ大統領が招集したスティグリッツ委員会では、経済成長だけでなく（beyond GDP）、暮らしの質を客観・主観双方から多面的に把握することの重要性が提議された。本研究で対象とする「自由に生き方を決めることができるか」という意識（以下、人生自己決定意識と略記）は主観指標の一つといえる。OECDが2015年に公表した主観的幸福度調査のガイドライン²によれば、人生自己決定意識は、エウダイモニア（Eudaimonia）的幸福の一要素である。エウダイモニア的幸福とは、意義深い人生を送るうえで有用な行為者としての潜在能力の保有の程度を指している。エウダイモニアには、人生自己決定意識のほかに、前向き

な感情、立ち直る力などいくつかの観点がある。

日本では、昨年10月「一億総活躍」が政策目的として提示された。ここでは、「一人ひとりが、個性と多様性を尊重され、家庭で、地域で、職場で、それぞれの希望がかない、それぞれの能力を発揮でき、それぞれが生きがいを感じることができる社会を創る。そのために、一人ひとりの希望を阻む、あらゆる制約を取り除き、活躍できる環境を整備する」とされている³。本研究で課題とする人生自己決定意識は、人生選択の機会（ライフチャンス）に関する意識であり、どのような属性の人たちが自由に生き方を決められていると感じ、逆にどのような人たちがそう感じていないのかを考察することは、ライフチャンスの社会的布置を解明するとともに、そうした機会の乏しい層（＝政策のターゲット層）を明らかにすることと言える。特に、若者の人生自己決定意識については、子どもの貧困の問題の観点から、彼らの所属する家庭の経済状況等との関連を解明する必要がある。しかしながら、これまでのエウダイモニア的幸福や人生自己決定意識の規定要因を探る先行研究はRyff et al (2003)⁴やAustin (2015)⁵などがあるものの、必ずしも多くない。

そこで、内閣府で行った、人々の生活実態や意識（幸福感や生活満足度など）を測定する「生活の質に関する調査」（平成23年度～25年度）を用い、人生自己決定意識の規定要因の検討を行った。

2. 学生で高い人生自己決定意識

人生自己決定意識の測定にあたっては、回答者自身や回答者が人生で感じたことについて、「全くそう思わない（0）」から「非常にそう思う（10）」の11段階尺度で回答を求めた。人生自己決定意識の年代・就業状態ごとの平均値をみると（表1）、年代では若年層（15～34歳）が5.66と高く、次いで、高齢層（60歳以上）5.52、中高年層（35～59歳）4.97というようにU字形になっている。就業状態については、学生の人生自己

1 「第5次国民生活審議会 調査部会中間報告」http://www.caa.go.jp/seikatsu/shingikai2/kako/spc05/houkoku_b/spc05-houkoku_b-I_3.html

2 経済協力開発機構（OECD）編著、桑原進監訳・高橋しのお訳（2015）『主観的幸福を測る－OECDガイドライン』明石書店。

3 「一億総活躍社会の実現に向けて緊急に実施すべき対策－成長と分配の好循環の形成に向けて－」https://www.kantei.go.jp/jp/singi/ichiokusoukatsuyaku/kinkyu_taisaku/hontai.pdf

4 Ryffらは、6つのエウダイモニアの要素に関して、人種・性別・年齢・居住地、教育歴、婚姻状態、被差別意識がどれほど規定力を持っているかを最小二乗法による重回帰分析で検証した。ただしRyffらが検討した自律性は「強く意見する他者に影響されやすいか」という質問によって測られた、いわば「見解の自律性」であり、本稿で検討する「自由に生き方を決めることができるか」という「人生の自律性」を問う質問とは異なっている。

5 Austinは、英国で行われた調査をもとに「人生自己決定意識」と収入の関連に言及している。「自由に生き方を決めることができるか」という質問に対して肯定回答（「とてもそう思う」と「そう思う」の合算）をした者は8割以上おり、これは収入を平均以上・以下で分けた場合でも大差がないという。本研究では、日本における「人生の自律性」の規定要因を検討するにあたり、Austinが投入していない要素、例えば、性別、学歴、就業状態、婚姻状態なども加えている。

決定意識が若年層で6点台と極めて高い。人生自己決定意識が最も低いのは若年層や中高年層では無職だが、高齢層では非正規雇用である。

表1 年代・就業状態別 「人生自己決定意識」の平均値、度数

		正規	非正規	無職	学生	合計
15~34歳 ***	平均値	5.58	5.21	4.75	6.25	5.66
	度数	717	333	219	690	1959
35~59歳 †	平均値	5.05	4.95	4.69	6.00	4.97
	度数	1668	763	428	5	2864
60歳以上 n.s.	平均値	5.64	5.34	5.53	5.00	5.52
	度数	482	398	1051	3	1934

注) 有意水準は各年代で一元配置の分散分析をした結果である。
*** $p < 0.001$ † $p < 0.1$

3. 若年層について—学生と学生以外で異なる経済状況の影響

若年層(15~34歳)の人生自己決定意識の規定要因を、学生と学生以外(正規雇用・非正規雇用・無職)に分けて、重回帰分析で探った(表2)。その結果、学生以外では等価世帯年収や本人年収が多いほど人生自己決定意識が高まるが、学生の場合はそれらが影響を及ぼしていないことがわかった。

表2 若年層(15~34歳)の「人生自己決定意識」の規定要因
学生と学生以外(正規・非正規・無職)の比較

	学生		学生以外 (正規・非正規・無職)	
	非標準化 回帰係数	標準化 回帰係数	非標準化 回帰係数	標準化 回帰係数
男性ダミー	0.036	0.007	-0.091	-0.016
年齢	-0.077	-0.076	-0.080	-0.119***
主観的健康感	0.458	0.160***	0.543	0.210***
等価世帯年収	0.000	0.058	0.000	0.053†
本人年収	0.000	0.065	0.000	0.111**
(定数)	5.231	***	4.779	***
N	566		1113	
調整済みR2乗	0.024		0.074	
F値	3.840**		18.759***	

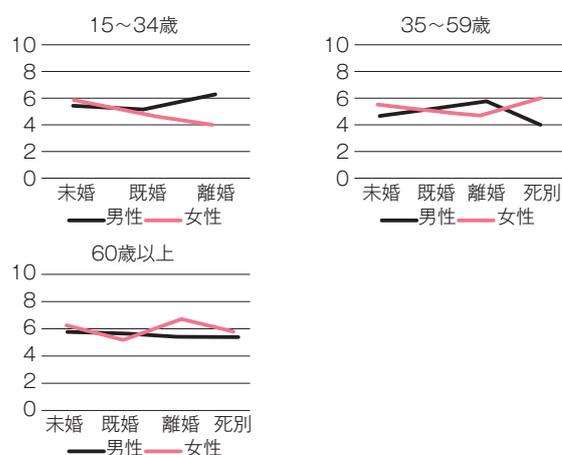
*** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ † $p < 0.1$

4. 正規・非正規・雇用者について—性別・年代で異なる婚姻状況の影響

学生以外(正規・非正規・雇用者)に関して全ての年代を対象に規定要因を分析したところ、人生自己決定意識を高める社会的属性は本人年収の高さ、高等教育機関を卒業していることであり、逆に低める社会的属性は既婚者であること・離婚死別を経験していることであった。この結果をさらに検証すると、年代・性別によって社会的属性の効果が異なることが明らかに

なった。例えば、婚者状態については、どの年代でも未婚の女性の人生自己決定意識は男性よりも高いが、既婚者については、女性はどの年代でも男性よりも低い。離婚については年代によって効果が異なり、若年層(15~34歳)や中高年層(35~59歳)では、女性の離婚経験者の人生自己決定意識は男性よりも低かったが、高齢層(60歳以上)では、女性の方が高かった(図1)。

図1 正規・非正規・無職の年代別・性別・婚姻状態別「人生自己決定意識」(性別×婚姻状態の交互作用項を投入した重回帰分析による予測値)



5. おわりに

同じ若者でも、学生と学生以外では、経済状況が人生自己決定意識に与える影響が異なること、具体的には学生の人生自己決定意識は家庭や個人の経済状況に左右されないことが明らかになった。これは本調査のサンプルの場合、学生の家庭が経済的に安定している(具体的には学生では父親の9割以上が正規雇用で働いているのに対し、学生以外では正規雇用の父親は7割弱にとどまる)ことが影響していると考えられる。このように学生の人生自己決定意識は学生以外(正規・非正規・無職)に比べ高いが、彼らが学校を卒業し次のステージに移る段階において、その意識がどう変化するかは検討する必要があるだろう。

また、学生以外に関しては、既婚女性の人生自己決定意識の低さの要因を明らかにする必要がある。特に育児や介護については、女性にかかる負担の重さがこれまで指摘されてきた。育児や介護の必要があるか否かによって男女の人生自己決定意識がどれくらい異なるかは検討する必要があるだろう。

河野 志穂 (かわの しほ)